

1 郡山に住み始めた人びと

一 縄文時代以前

一九四六(昭和二十一年)年、当時二十歳の相沢忠洋は、群馬県新田郡笠懸村(現・みどり市)の切通しの赤土(関東ローム層)の中から黒曜石の破片を発見した。火山の噴火が多く、人間が住めるような自然環境ではないと考えられていた、火山灰が積もってできた層で発見したのである。相沢はその三年後、この地層から今度は黒曜石で作られた石槍を見つけた。この発見によって縄文時代を遡る文化の存在が確実となった。いわゆる「岩宿の発見」である。

旧石器の存在が明らかになると、全国でこの時代の発見や発掘が相次ぎ、福島県でも、岩瀬郡鏡石町の成田遺跡で一九四七(昭和二十二年)年に発見されていたナイフ形石器や石刃が旧石器とわかり、一九五五(昭和三十一年)年に公表されている。

二 石の文化

日本の歴史で一番長かった旧石器時代は、今から約四万年前から、土器を使い始める約一万三〇〇〇年前までの間、おおよそ三万年間は続いた。この時代は最後の寒冷期後半にあたっていて、日本列島の年平均気温は五〜七度ほど低かったと推定されている。この気候は、現在の北海道網走市付近と類似するとされ、今は絶滅したマンモスやナウマンゾウなどの大型ほ乳類が生きていた。

長い時代であるにもかかわらず、発見されるものや判明したことは決して多くはない。それは、木や骨あるいは皮製品などの有機質が、酸性の土壌によって分解されるからであり、旧石器時代の遺跡で出土するのはほとんどが石で作られた道具なのである。また、移動生活をしていたために、発見の機会も少ないと考えられている。

三 石器研究の進展

旧石器時代は、研究材料のほとんどが石器である。同じ形状の石器を分別することで、当時の人々は、使用目的によって原石を打ち欠いて決まった形に作っていたことがわかり、石器の種類が見極められるようになってきた。また、遺跡から出土する剥片を接合することで、どのような石をどのように打ち欠いて最終的な石器が出来上がるのかを明らかにするなどして、石器を作る技術の研究も進められてきた。

これらの研究で、現在までに日本列島で確認されている旧石器は、後期旧石器時代と呼ばれている時代に属し、初めの頃には、部分的に磨かれた石斧(局部磨製石斧)や台形の石器が主流で、次に切る道具のナイフ形石器が多く使われた時期、尖頭器と呼ばれる槍先が加わる時期、木や骨に装着して使用された細石刃が主流となる時期を経て、土器が出現する縄文時代に移っていくという過程が明らかになっている。

四 石器の種類

日本における後期旧石器時代の幕を開けた時期に特徴的な石器として、台形やペンの先のように加工された小型の石器と局部磨製石斧がある。前者は、突き刺す、切るための石器と考えられている。後者は、当初は木材の伐採・加工などに使用され、摩耗すると研ぎ直すのだが、研ぎ直しにより石器自体がだんだん小型になるため、そうなったものは、皮なめしなどの作業用に転化したのではないかと推定されている。この局部磨製石斧は、後期旧石器時代の後半には突然姿を消す道具で、これは木材の伐採がなくなったことを表し、謎とされる。ただし、東北では、後期旧石器時代の終わり頃にも使われていたようだ。

次の時代を画するナイフ形石器は、剥片の鋭い縁辺を一部残し、基部あるいは側縁に急角度の加工をした石器で、文字どおり、切ったりあるいは刺したりする道具と思われる。

尖頭器は、木の葉のような形に加工された石器で、突き刺したり切ったりする道具と考えられている。

五 旧石器時代の生活

旧石器時代には、まだ土器が発明されていないので、煮て食べることはできなかった。しかしながら、たとえば喜多方市(旧・高郷村)塩坪遺跡では、焼けた自然石が集まった礫群が発見されている。石は細かくはじけたり、くすんだ色をしていて、熱を受けたものである。これは、後期旧石器時代の遺跡ではしばしば見られる遺構で、石を熱して水を沸騰させて料理する、蒸し焼きをした痕跡と考えられている。また、近年の発見では、動物を捕獲するときに利用する落とし穴などもある。仙台市富沢遺跡では、約二万年前の樹木が発見され、焚き火の跡や石器もまとまって出土した。現在は草原に針葉樹がまばらに生えていた当時の姿が復元されている。

六 郡山の旧石器人

郡山市域の旧石器時代遺跡から出土する石器は、田村町宮田 A 遺跡・同じく田村町の正直 C 遺跡、西ノ内の郡山館遺跡・安積町の荒井猫田遺跡・熱海町の熱海遺跡など、主に石器を作るための元になった石で、しかも一点ないし二点の出土が多い。そのような中で、田村町守山の弥明遺跡では、複数の石器がまとまって出土している。出土した石器はすべて頁岩製で、ナイフ形石器が三点・穴を開けるのに使われた角錐状石器が一点・動物の皮から肉を掻き取ったり、なめしたりするのに使用されたと考えられる、円形のエンドスクレイパーが一点などであり、約二万年前の石器と考えられている。切る、削る、穴を開けるなど、石器が多くの道具に分かれた、後期旧石器時代後半の特徴をもった資料である。また、複数の石器が一カ所で出土したことから、この遺跡が他の遺跡と異なるのは、たまたま石器の材料が持ち込まれたのではなく、動物などの捕獲と加工そして、ある程度の滞在が考えられる遺跡であることである。

このような石器^{たざき}を携えて、郡山に住んだ旧石器人も季節に応じた食料を求め、植物を採集したり動物を捕^とったりしながら移動生活をしていたのであろう。

(柳沼賢治)

2 移動から定住生活へ

一 環境の変化

今から約一万三〇〇〇年前になると、日本列島は温暖化が進み海面が上昇した。旧石器時代の最も寒冷期(約二万年前)の海面は、現在より約一二〇mも低かったと考えられている。ところが、縄文時代前期(約六〇〇〇年前)になると、関東地方の海面は現在より二mも高くなり、平野に深く海が入り込んだ。

また、旧石器時代には針葉樹^{しんようじゆ}が目立っていたが、縄文時代になると、日本列島の特に関東地方や東北地方では、ナラやブナなどの落葉広葉樹^{らくようこうようじゆりん}林が広がり、ナウマンゾウやオオツノシカなどの大型獣が相次いで絶滅し、代わってニホンシカやイノシシなどが大型の部類になった。このような植生の変化によって木の実などが人びとの主なカロリー源となり、動物相(その場所に生きている動物の種類)の変化は、捕らえるための技術の開発へと進んだ。

このように人びとを取り巻く環境の変化は、季節ごとの食料が得られる一定の範囲で活動する、定住生活につながった。

二 縄文時代の住まい

縄文時代の人びとは、直径あるいは一辺が四~五mないし七m程度の、地面を掘りくぼめた半地下式の竪穴住居をつくり、川沿いの高台などに住んでいた。住居の中にはさらに数カ所の小さな穴を掘り、そこに丸太を立てて上屋を組み立て、屋根は木の枝や茅^{かや}で葺かれた。冬には暖かく夏は涼しい竪穴住居に四~五人の家族が住んでいたと推定されている。縄文時代にはこのような住居が集まって集落を形成していたのである。

一万数千年間続いた縄文時代は、緩やかに時が流れ変化^{とほ}に乏しい時代と考えられがちであるが、つぶさに見ていくと、集落の構成や住居内部の構造など一様ではない。それは、取り巻く環境が、時期や地域ごとに違っていたからであろう。

大槻町の大槻八頭遺跡^{やがしらいせき}(縄文早期、約六五〇〇年前)では、長方形や楕円形の竪穴住居跡で、土間の中央付近には、火を焚いた炉跡が赤く残っていた。炉は、煮炊きに利用されたほか、暗いときの明かりになったり、冬には暖房の役目をもっていた。

この時期の集落では、竪穴住居が濃密に分布するというものではないが、数棟が一カ所に集まって生活していた。

三 人口の増加と集落の拡大

今から約四〇〇〇年前~五〇〇〇年前の中期は、縄文時代でも栄えた時期である。東日本では集落が急激に増加し、その規模も大きくなる。

中期後半~末にかけて営まれた逢瀬町^{かみなつとうちいせき}の上納豆内遺跡では、一

〇七棟の竪穴住居跡が確認され、西田町と富久山町にまたがる曲木沢遺跡^{まがきざいせき}や熱海町のびわ首沢遺跡^{くびざいせき}などでも大規模な集落が相次いで営まれていた。この時期の東北南部では、前期とは異なり複式炉と呼ばれる特異な屋内炉が流行した。堅果類(栗やクルミなど硬い皮や殻のあるもの)を暖めて皮をむく作業場などと考えられる前庭部、火を焚く石組部、焼き物をしたり、熾きを保管したりする土器埋設部からなる。このような用途であったとすれば、複式炉は、食料の種類と調理法を変える炉形態だったとも考えられる。

曲木沢遺跡では、通常の竪穴住居跡群の一面に巨大な住居跡が発見されている。ここからは有孔鏝付土器という、口縁側面に孔(穴のこと)が一周する特異な土器が出土した。孔には紐を通して皮を張り太鼓にしたとする説や、酒を入れた容器だとも言われている。

特殊な器を持っていたこの住居跡は、大型であることを考え併せると、集落の人びとと全体に関わる行事や集会などに利用された、公共性の高い施設だった可能性が高い。この遺跡ではほかに妊娠した女性をモデルにした土偶^{どぐう}が出土している。土偶は、集落の豊穡^{ほうじよう}や人びとの再生を祈った土製品と考えられている。

集落の規模がピークに達する縄文中期の終わり頃には、中央に広場をもった環状^{かんじよう}の集落が発達した。上納豆内遺跡は直径が約四〇mの環状集落であり、中央の広場では、まつりや狩りの相談、獲物の分配などが行われたようだ。

この時期に集落の規模が拡大する現象は、植物質食料の活発な利用に加え、集団で行う活動が人びとの結びつきを強めたことが背景にあったと思われる。

四 寒冷化と分散居住

縄文後期(約四〇〇〇年前~)になると、敷石住居^{しきいしじゆうきよ}が流行する。敷石住居は住居内の一部に石を敷き始めたのが始まりで、中期後半の複式炉の周辺に部分的に敷かれたものが発達したと考えられている。住居の中ほどに四角く石を立て並べた炉があり、日常生活ができるものであるが、この時期には同時に普通の形態の竪穴住居跡も存在することから、敷石住居はまつりなどの際に利用する特殊な施設だったという意見がある。

西田町の馬場中路遺跡^{ばななかみちいせき}の敷石住居は、周囲で数カ所の墓標^{ぼひよう}と思われる石組みが発見されているだけで、住居はこれ一つしかなかった。この敷石住居は、葬送などのまつりに使用する特別な建物だったようだ。

後期の集落は中期と比較すると発見の例が減少する。この時期は、また寒冷化が進んだ頃で、拡大した集落では、それまでの領域で得られる食料ではまかなえきれず、分散して生活しなければならなかったためと言われている。

(柳沼賢治)

3 縄文人の食生活

一 木の実と動物そして水産物

野山の木の実やシカ・イノシシなどのほ乳動物、臨海の魚介類は、縄文人の三大食料資源とも言われる。これらの食料は、温暖化によって起こった生態系の変化がもたらしたもので、生活そのものの大きな変化の要因である。

また、土器と弓矢の出現は、縄文時代を特徴づける要素であり、植物相や動物相(その場所に生きる植物や動物の種類)の変化に応じた環境への対応の結果で、道具の革新でもあった。それらは、食生活の大きな変化にも結びついた。

縄文人が摂るカロリーの半分は、植物が占めていたと言われている。海に面した福井県鳥浜貝塚では、縄文人が食べ残したものを分析した結果、摂取カロリーの比率は、クルミ、ヒシ、クリ、ドングリなどの木の実が四二%、残りが魚を主とした肉類で、貝などは八・五%にすぎなかったという。海岸付近でさえ木の実は重要な食料だったのである。

二 食料の貯蔵

縄文人のカロリー摂取に大きな役割を果たし、しかも堅い皮に包まれた木の実、保存するのにも最適であった。それを裏付けるように、縄文時代の遺跡を発掘すると、しばしばこれらを貯蔵したであろう穴が発見される。例えば、縄文早期の熱海町新田B遺跡(約六五〇〇年前)では、籠のような編み物とともにクルミが発見されているし、中期の富久山町妙音寺遺跡(約四五〇〇年前)では、大きな貯蔵穴から三三三個もの土器が出土したことから、食料を土器に分けて貯蔵されたと推定されている。三春町の仲平遺跡でも、クルミを貯蔵した晩期(約二五〇〇年前)の穴が発見されている。

このように、地面を掘った屋外の貯蔵穴は、保管するだけでなく、一定の温度を保つことができるため、保存にも役立つ。縄文時代の初めごろから、木の実の特徴をよく知った施設として屋外の貯蔵穴が頻りに利用されたと思われる。保存食は、このような穴のほかに、堅穴住居内でも、土器や籠、皮袋などに入れ屋根裏などに置かれたであろう。

先の新田B遺跡で出土した籠のような編み物は、屋外の貯蔵穴から出土したものであるが、断面が丸い植物繊維を裂いて作られたもので、編み方をやや複雑にして装飾効果をあげている。早期にはすでに、このような入れ物が製作されていただけでなく、装飾効果にも気を遣っていた。この編み物は、大分県横尾遺跡で出土した、黒曜石の入った籠などと並んで、列島最古級であり、当時の入れ物と編み物技術の水準の高さを示している。

三 食料の獲得と調理

縄文時代になって使われ始めた土器は、煮炊きを可能にした優れたものだった。特に、植物を潰した粉は、煮沸すると消化吸収が容易になるという指摘もあるように、固形物を粉にする石皿や

磨石の出現によって、さらに本領を発揮したであろう。土器の普及は、木の実などの植物質食料を急激に増大させる方向へと向かわせたに違いない。

中小動物が多くなった縄文時代には、素早い動きの動物を捉えるために飛び道具が必要であった。弓矢はこの欲求を満たす道具である。旧石器時代にも似たような石器は使われていたが、より鋭く速く飛ぶ石鏃は、中小動物を捕獲するための洗練されたツールと言えよう。

弓矢のほかに富久山町堂坂の堂後遺跡では、猟に使用する落とし穴が、列をなした状態で発見された。これは、シカやイノシシなどが通る道筋に仕掛けた罠で、穴の底には先のとがった逆茂木(先端をとがらせた木の枝などを並べたもの)を設置し、落ちた動物を傷つけ動きを止めるものである。中田町の赤沼遺跡や先の妙音寺遺跡では、落とし穴の底に逆茂木あるいはその一部が残っており、猟の実態が確認された例として貴重である。落とし穴に動物を誘導する作業は、おそらく何人かの共同作業であったことが推測される。

海では魚介類を捕獲するために、骨で作られた銚や釣り針それに錘を付けた網などが使われた。

内陸でも、湖南町舟津の山ノ神遺跡、逢瀬町の四十内遺跡、田村町の鴨打A遺跡、西田町の町B遺跡などで土製や石製の銚が出土している。これらは、近くの河川や沼で水産物を捕るための道具であったと考えられる。そのことを彷彿とさせるのが、富久山町の妙音寺遺跡で出土した淡水産のカワシンジュガイである。海のなないこの地域でも川や沼などで水産の食料を得ていたことがわかる。

四 食料への思い

狩猟・漁労・採集によって生活していた縄文時代の人びとにとって、食料を手に入れることは高い関心事の一つであった。湖南町の山ノ神遺跡では、縄文後期後半から晩期前半の土器とともに、木製の弓が出土している。この遺跡では、発掘調査前に、弓でシカを射る様子を線刻した礫が採集された。発掘調査では、プール状のくぼみの中で弓あるいはその未製品が出土し、弓が製作されていた痕跡と考えられる。線刻礫は、採集品ではあるが、弓の製作に関わる儀礼などに使用されたものではなかったかと思われる。

(柳沼賢治)

4 縄文時代の広域交流

一 地産地消

縄文時代の人びとは、環境の変化に対応する過程で、衣食住にまつわる多種多様な道具を、身近な場所で手に入る材料を使って製品化した。

堅穴住居は、打製石斧を使用して掘りくぼめ、周辺の林から磨製石斧で伐採した材木を使って上屋を組んだことであろう。また、

身近な衣には、繊維や皮製品が使用されたと思われるが、出土例は決して多くなく、残っているのは極めてまれである。一方に穴の開いた細い骨製の針などは、編布などを縫うために使用されたものと考えられる。石製のスクレイパーと呼ばれる皮をなめす道具の出土から皮製品の存在も推定される。

食料を得るための道具には、狩猟用として、旧石器時代から使われている石槍に弓矢が加わった。漁労具には、骨製の釣り針や網の錘などが、また、調理するために必要な土器は、近くの粘土層から原料を手に入れて、野焼きしたのである。

二 見慣れない土器

縄文時代の遺跡を発掘すると、身近に手に入る材料で作られたものの他に、地元にはないものが出土することがある。それらには、数十から数百kmに及ぶ遠隔地で見られないものも含まれている。

縄文土器という名が付いたように、縄文時代の土器には多くの場合、縄目の文様が付けられている。ところが、新潟県を中心に分布する中期の土器には縄目がついていないものがある。燃えさかす炎に似ているために「火炎土器」と呼ばれる土器がそれである。

富久山町の妙音寺遺跡では、作り方が火炎土器に似ているだけでなく、焼き上がりの色や質感が地元のものとは思えない特徴のある土器が出土し、運ばれてきたものである可能性が高いと考えられている。このほかに山王館遺跡や西田町の野中遺跡では、地元の粘土で作られたと思われるものの、特徴が火炎土器に類似した土器も出土している。

また、田村町の鴨打A遺跡で出土した土器は、底の部分がどっしりとして、これも地元のものとは違うことがすぐにわかる。底部近くを強調したこのような土器は中部高地に多い。

縄文土器は、表面に縄目と組み合わせて、別な工具を用いて文様を描いた。それらの工具の中には、近くでは得られない素材がある。曲木沢遺跡で出土した早期中頃の土器片には、海辺で採れるサルボウやアカガイなどの口を押しつけた文様が見られる。

三 見慣れない石

縄文時代になると、狩猟用の道具として旧石器時代から使われていた石槍に弓矢が加わった。ほかにも、土を掘るときに使用する打製石斧、皮をなめすときに使うスクレイパー、皮に穴を開けるときに用いる錐などの道具がある。そのほとんどは、地元で得られる石材を加工して作ったが、まれに黒色でガラス質の黒曜石が出土する。郡山館遺跡で出土した旧石器時代の石器がそれであり、縄文時代遺跡でもわずかに出土する。黒曜石は産出する場所が近くとも宮城県北部の湯ノ倉や、栃木県那須の高原山であるため、活動範囲を広げないと入手できなかった石材である。

石器とともに装身具に利用された石にヒスイがあげられる。ヒスイは、主として胸元を飾る装飾品で、新潟県・富山県の県境付近に限って産出する石である。見るからに宝石らしい濃緑色のもの

のから、一見、宝石にはほど遠い白色のものまでであるが、西田町馬場中路遺跡で出土したものは、形は丁寧に作られているものの白色の大珠である。縄文時代の人びとは、石材は雑なものであれ、ヒスイという石そのものに共通した価値を見いだしていたようである。

四 アスファルト

縄文時代に新たに登場した石鏃は、矢柄(矢の幹の部分)の先に装着して使うが、そのときに、接着剤として使われたのがアスファルトである。新潟県胎内市では現在でもアスファルトが地上ににじみ出ている地点があるように、新潟県や秋田県など日本海沿岸の一部で産出する。逢瀬町の四十内遺跡では土製の耳飾りに入れたアスファルトや、根元にアスファルトが付着した石鏃が出土している。鏃と柄を接着するのに用いたのである。

縄文時代の人びとは、住居の建設や修理に必要な資材、籠を作るための繊維質植物、これらを切ったり削ったりする道具の石材、土器を製作するための粘土など、日常生活を送るために必要な物資のほとんどは、集落の周辺で手に入るものを利用した。しかし、すべてが手近な場所ではまかなえただけではない。縄文時代は、日常生活を送る上で必要な物資は生活圏内で確保することを基本としつつも、隣接する集落同士のネットワークを通して、時には遠隔地から必要な物資や情報を入手していたとみられる。

このように、隣接する地域どおしを最小単位とした、物資や情報の交換、人の行き来などでそれぞれの集落が結びつく関係が広い範囲に及び、結果として、縄文という類似した文化が日本列島に展開したと思われる。

(柳沼賢治)

5 採集・狩猟と稲作

一 稲作の始まり

一八八四(明治十七)年に東京本郷弥生町(現在の文京区)で薄手の壺形土器が発見された。この土器は、それ以前に知られていた大森貝塚の貝塚土器(縄文土器)とは特徴が異なるため、弥生式土器と呼ばれ区別されていたが、昭和になって、稲作をしていた人びとが使用した土器であることがわかった。弥生時代という名称は、この土器の出土にちなんでつけられたものである。

弥生時代が縄文時代と違うのは、稲作農耕を始めたことにある。その起源は、インド北東部のアッサム地方とそれに隣接する中国の雲南省と考えられてきたが、近年では中国揚子江の中・下流域にもっとも古い資料が集中することから、この地域が有力視されている。稲作の技術やこれに関連する文物は、発祥地から中国北東部に広がり朝鮮半島を経由して、紀元前三〇〇年ごろに九州北部に伝わったと考えられている。以後、この時代は古墳が出現する西暦二〇〇年代の中頃まで続く。

二 東北の弥生時代

東北の弥生時代研究は、一九二五(大正十四)年、山内清男が、宮城県多賀城市の榊形圓貝塚から出土した土器の底部に、イネの圧痕があるという論文を発表したことに始まる。その後、一九八二(昭和五十七)年～一九八三年にかけて調査された、青森県垂柳遺跡の発掘で中期の水田が発見され、稲作が確実視されるに至った。

郡山では、一九六九(昭和四十四)年に東北大学が調査した大槻町福楽沢遺跡で籾痕のついた弥生土器が出土していた。この成果は、水田発見までに積み上げられた状況証拠の一つと言える。

三 弥生時代の先進文物

採集・狩猟・漁労を中心とした縄文時代と、稲作農耕を取り入れた弥生時代では、生活様式が異なるため出土する道具などに違いが見られる。生活全体の中で、稲作とその作業がどの程度の比重を占めていたかは定かでないが、水田跡の発見やこれと関係する道具の出土によって、東北でも弥生時代に稲作が行なわれていたことを知ることができる。

いわき市番匠地遺跡や中山館跡では中期後半の水田跡が発見されている。また、福楽沢遺跡や田村町大安場古墳の発掘調査では、木製農耕具を作るために、木の伐採や加工をするのに使用された太型鋸刃石斧が出土している。この道具は、稲作とともに大陸から伝わったものの一つである。さらに、三春町吉田遺跡、三穂田町、田村町南山田遺跡などの阿武隈山系や郡山盆地では、稲の穂を収穫するときを使う石包丁が出土しており、このような道具も大陸からもたらされたものである。

弥生時代になると、新たに鉄が加わったとされるが、東北で鉄器が出土した例は極めて少ない。福島県では、須賀川市松ヶ作A遺跡の小刀のような鉄製品(前期後半～末)やいわき市白岩堀ノ内遺跡で鉄製の銚(中期後半)が出土している程度である。土の中では残りにくい鉄製品ではあるものの、この地域では、多くの集落で鉄が日常的に使用された痕跡は認められない。

四 縄文時代の伝統

九州北部では、稲作が伝えられて間もないころに、「遠賀川式」と呼ばれる弥生土器が使われていた。西日本以西に広がったこれに類似する壺や甕が東北でも出土している。それは、会津若松市墓料遺跡、三島町荒屋敷遺跡、石川町鳥内遺跡、霊山町根古屋遺跡などの土器で、数は少ないながら、列島で最初に稲作を始めた地域の影響が、早い時期にこの地方にも伝わったことがわかる。

しかしこれらのほとんどは、東北の縄文時代晩期の伝統を受け継いだ土器と一緒に出土しており、中には模倣したものや縄文をつけたものなど、そのものとは言えない土器もある。稲作を始めた地域の影響を受けながら、一方では、縄文時代の伝統も色濃く残っていた。

アメリカインディアンが使っていたものと似ているために名付

けられたアメリカ式石鍬は、弥生時代に北関東から東北にかけて使われた縄文時代的な石器で、熱海町水無遺跡や大槻町福楽沢遺跡で出土している。また、大槻町阿弥陀壇遺跡、柏山遺跡、田村町南山田遺跡から出土した石鍬は、縄文時代から続く土掘具の一つである。

弥生時代の東北では鉄製品がほとんど使われず、狩猟や農耕に必要な道具が石で作られた事実からみて、鉄の入手が非常に困難だった地域と思われる。

生活用具のほかには埋葬方法にも伝統の残存がみられる。縄文時代の終末から弥生時代中期前半まで造られた再葬墓は、遺体を白骨にしたあと、骨を土器に入れて埋納する方法で、最も古い再葬墓が福島県の会津から中通りにかけて発見されているため、この地域で成立したと考えられており、逢瀬町の桜木遺跡や福楽沢遺跡で確認されている。

再葬の際に使う土器の中にしばしばみられる人面付土器も、縄文時代の土偶のなごりと言われており、田村町徳定遺跡で出土している。

このように、東北の弥生時代には、伝統的な縄文時代の要素と新たに取り入れた文物とが混在するという特徴がある。例えば南西諸島では、本州の平安時代頃まで稲作は行なわれず、漁労を中心とした生活が残っていたと考えられている。これが示すとおり、稲作はそれが可能な気候であることが条件の一つではあるが、必ずしも絶対条件ではなく、唯一の選択肢ではなかったようだ。縄文時代の伝統を残しながら稲作を取り入れた生活形態は、東北の弥生人が自ら選択したものだったと考えられる。

五 装身具にみえる地位

弥生時代の装身具として、縄文時代の勾玉に加え、朝鮮半島から新たな技術と素材の管玉が伝わった。柏山遺跡では、墓穴から緑色の管玉が出土している。装身具の色は装飾性の一要素で、緑色は特に珍重された。絶対数の少ない勾玉は地位の高さを示すが、管玉の場合は、その数が社会的地位の上下を表していたと考えられている。柏山遺跡の管玉は、この地で稲作による身分の上下関係が始まっていたことを示す、象徴的な遺物と言える。

(柳沼1賢治)